

## 第108回宇宙政策委員会 議事録

1. 日時：令和5年12月5日（火） 16：00－17：30

2. 場所：中央合同庁舎4号館共用1214特別会議室

3. 出席者

(1) 委員

後藤委員長、常田委員長代理、遠藤委員、片岡委員、櫻井委員、白坂委員、鈴木委員、松尾委員

(2) 事務局

内閣府宇宙開発戦略推進事務局

風木事務局長、渡邊審議官、滝澤参事官、加藤参事官

(3) オブザーバー

内閣府特命担当大臣（宇宙政策担当）：高市大臣

(4) 関係省庁

総務省国際戦略局宇宙通信政策課：扇課長

文部科学省研究開発局：千原局長

文部科学省研究開発局宇宙開発利用課：上田課長

経済産業省製造産業局航空機武器宇宙産業課 宇宙産業室：伊奈室長

国土交通省総合政策局技術政策課 技術開発推進室：村上室長

環境省地球環境局総務課 気候変動観測研究戦略室：石原室長補佐

防衛省防衛政策局戦略企画参事官 宇宙・海洋政策室：中野屋室長

4. 議事（○：意見等）

(1) 宇宙技術戦略に関する考え方について

<事務局より説明>

○片岡委員 今回、初めてJAXAの基金で10年で1兆円、防衛省の方も5年で1兆円ということで、予算が大規模についていますけれども、戦略というのは資源配分の方向性を示すということで極めて重要ですので、この予算措置プラス戦略で方向性を具体的に示していくということが重要で、その意味でもこの技術戦略は極めて重要となります。

特に「民間事業者を主体とした商業化に向けた開発支援について道筋を示していく」、この道筋を具体的にロードマップの中に示していくことが重要だと、

商業宇宙活動というのは安全保障でも必須の分野になっていきますので、安全保障にとっても非常に重要な国内の商業宇宙活動基盤をどうやって育てていくか、どうやってスピードアップして育てていくかが重要なので、この方向性でいいと思いますので、ロードマップの中により具体的に示すオールドとニューのスタートアップをコラボレーションしていく戦略も、スタートアップだけではなくてコラボレーションしていく全体として、商業宇宙活動基盤を育成していくという観点でロードマップをぜひつくっていただきたいと思っています。

○常田委員長代理 宇宙戦略基金の創設は大変いいことだと思うのですが、JAXAに戦略的、弾力的な資金供給機能を持たせるということで、今までJAXAはこういうファンディングエージェンシーとしての仕事をやってこなかった面があるので、額を考えますとかなり大変な事業であり、かつ確実にやらなければいけないということがあります。JAXAがこれをスムーズにできるように支援とか、各所管官庁からの支援体制が非常に大事だと思いますので、その点、文科省ですか、どういうふうにサポートしていくのかというのがあればお聞かせ願いたいと思います。

○風木局長 まず、片岡委員からありましたロードマップを具体的にしていこうというコラボレーションが重要ということで、事務局、関係省庁でしっかりヒアリングしていったら、より具体化していくということで、今、既に作業を始めております。

それから、常田委員長代理からありましたJAXAのファンディングエージェンシー、これは関係省庁、特に今日も御出席いただいております文科省、経産省、総務省を含めて、しっかり資金供給が果たせるような体制づくり、人材面もそうですし、いろんなノウハウ面もそうですし、そうした支援体制をしっかり築くという前提で進めております。

○遠藤委員 技術戦略をこれから議論して工程表をつくっていくということで、宇宙基本計画とリンクしながらいいロードマップになるようにこれから議論を深めてまいりたいと思っています。

先ほどから出ている宇宙戦略基金につきましては、当然、総務省、文科省、経産省の基金から出るお金の合算というわけですけれども、先ほど片岡委員が言われたような防衛省のお金と、例えば経産省でいけばK Programとか、他の資金があると思いますが、そことの整合性をしっかり取りながら有効に使っていかなければ、単にこれだけの基金ができましたということになってしまいますので、その辺りの連携も忘れずに整えていくという仕組みが必要なのではないかと思っています。

○風木局長 まさに御指摘のとおりで、経済対策に「防衛省等の宇宙分野における取組と連携し」とあるとおり、防衛省、K Program、国交省、農水省、環境

省等を中心にしたユーザー関係の省庁と連携するということになりますので、宇宙政策委員会も一つの結節点ということになりまして、関係省庁、全省庁参加の上、今後、内容をしっかり深めていきたいと考えております。

○松尾委員 このように大きな予算がついて、日本を挙げて宇宙に関する宇宙技術といいますか、支援していくということを明確にされたことは大変良いことかと思えます。その中で懸念としまして、先ほど挙げられましたように、JAXAがこれまでやったことがないような仕事が含まれるということで、傍で見えておまして、今までのJAXAのままでこれがちゃんと進められるのかということと、人材といいますか、そういった仕事をするという意味で、そのままよいのか、別の団体を介するような形になるのかという気もしているところです。とはいっても、間を介することで10%、20%取られるようなことになっては話がおかしいので、その辺のところは運用と運営をしていただくようなところがしっかりしていただかないと、これに期待が大変大きいかと思えますので、そのところをスムーズにやっていくことが本当に重要かと思えます。

そして、これはかなり大きな予算ということなのですが、例えば輸送系だけにかかわらず、宇宙開発技術においても、SBIRですとか、いろんなスタートアップのような、多少トラディショナルの事業者も入っているかと思うのですが、スタートアップに対して、今、既に予算がついているというふうな形で順調にいつているかと思えますが、その先がちょっと見えていないようなところもあります。そういった意味で、アンカーテナンシーといいますか、作っていくけれども、打上げるようになってもらいたいけれどもと言いながら、その先に不安を感じている民間の事業者さんのお話も伺ったりしますので、その辺のところまで見えてくれば、アンカーテナンシーというところもこのマップの中に入る、もしくは商業化においても先が見えるような、これはロケットだけではなくて様々な開発をしているところが多いかと思えますので、そういったところが見えるようになっていくと、より精力的に皆さんも頑張っていただけるのかなと思っているところです。

○文部科学省 先ほど常田先生からもJAXAの体制について御心配の御指摘を頂きました。基本は風木事務局長がお答えになられたとおりでございまして、既に風木事務局長と私ども相談していますし、JAXAともいろいろ体制の強化について相談させていただいています。

4月1日以降、公募が始まっていくという状況なので、JAXAのこの基金の執行管理ができる体制を強化する。こういった基金の管理というのは、今、フルオープンではないのです。文科省にも知見がございますので、そういったところをJAXAのほうにもしっかり伝えていきたいと思えます。

どこまで外出しするかでございますけれども、根本的なところはJAXA自体が

担っていきたいと思います。そういう資金の管理だけではなくて、JAXAが先ほど御紹介ありました産学官の結節点ということで、今までいろいろな研究開発による知見とか、技術的な助言とか、そういったところができるのはJAXAでございますので、そういったことの機能も使いながら、民間、大学等と連携していくという意味で、メインの業務についてはJAXA本体でやっていただく予定にしています。

ただ、例えば公募するときの委員会の回しですとか、日程調整とか、ロジスティクスのなところは逆に外部の機関を頼ったほうがより効率的に出来る部分もあるだろうと思っておりまして、そういったところは外部委託するというのも考えております。重ねて恐縮ですが、メインはJAXAにやっていただくということを考えております。

○風木局長 今、文科省からあったとおり、体制作りについては、正に宇宙政策委員会の基本方針をしっかりと立てて、各省の実施方針も踏まえて、JAXAの方の体制も、フラットな形で関係省庁、ステークホルダー、JAXAの関係者でよく議論できる、意思疎通が図れる体制づくりを既に準備を始めておりますので、しっかり対応していきたいということです。

後半のアンカーテナンシーは御指摘のとおりでございます。今回、基金で10年ということで予見可能性を頂きましたので、これからアンカーテナンシーの開拓は、米国の事例は非常に成功しておりますし、欧州もそうした形で力を入れておりますので、これについては具体的にユーザー官庁と議論を開始しております。それをより具体化していくというのは、10年頂いた期間、それから今まであるK Program、SBIRも同じ論点でございます。これだけ大きな予見可能性が高まった中で、今日御出席の関係省庁とも既に議論を開始していますので、その具体化を進めてまいりたいと思っています。

○白坂委員 今、議論していただいた所に被る所ではあるのですが、まさに宇宙戦略基金の所でございます。通称でJAXA基金と言われていまして、JAXAにつけるわけではございますけれども、これはあくまで宇宙の戦略のための基金であるので、もちろんそうならないと今の議論の中から理解していますが、宇宙戦略としてどこを攻めていくか、そういった議論が技術戦略も併せて今から行われていくわけなので、どこにお金をつけるかということに関しても、国として戦略的に成長させていきたい所を狙いながらやっていきたいというところはもちろんあります。ですので、単に審査だけの話でなくて、どこにお金を配分して、この基金を使いながらこれから何を育てていくのか、あるいは強くしていくのかという議論もちゃんとできる人たちが入ってやらないといけない。偏ってしまって、せっかくの戦略基金が戦略にならないともったいないので、その辺りをきちんと気をつけていただきながら運用していただければと思います。

この基金がついたのは宇宙業界としてはすごく大きなことだと思っていますので、是非これをちゃんと生きる形にさせていただければと思います。

○片岡委員 皆さんおっしゃっているように技術戦略はこれから非常に重要なのですけれども、先ほど申しましたように安全保障についても、商業宇宙活動、商業宇宙基盤というのは極めて重要ですので、技術戦略の策定は防衛省の方もこれからきちっと絡んでやってほしい。防衛省の5年の予算の1兆円と今回のJAXAは、今後ある程度整合を図られるところは図っていくというのが重要ですから、防衛省のほうも技術戦略をさらに真剣に絡んでいただきたいと思いますので、よろしくをお願いします。

○防衛省 防衛省といたしましても、既にかなり熱い議論を各省とさせていただいているところでございますので、しっかり取り組んでいきたいと思っております。

○後藤委員長 令和5年度補正予算で3,000億円、3つの省でそれぞれ分かれているのですが、この3,000億の具体的な運用内容というのはどうなのですか。

○風木局長 これは、まず内閣府のほうで全体の基本方針を立てる予定にしています。宇宙政策委員会のほうにも御検証いただくためにお諮りしたいと思います。これは予算で各省についている関係で、各省が基本方針に沿った形で実施方針を立てる形になります。その実施方針を受けて、実際の予算額がJAXAのほうに基金の造成のために出されまして、そこから4月以降、JAXAが具体的に公募していくということになります。公募に当たっては、宇宙戦略基金、白坂委員のコメントもありましたとおり、勝ち筋ということがある程度示されて、一定のガイダンスが示されます。それに沿って各省がさらに深掘りした形、そしてJAXAの方ですので、戦略は実際に反映される形です。他方で、公募ですので、もちろんそこから先のかなり細部にも論点が出てくるので、そういう意味でJAXAのチームの体制も極めて重要だと認識しております。

○後藤委員長 ここはこれからということですね。一方で、総務省240億、文科省1500億、経産省1260億とかなり具体的な数字が出ているのだけれども、ある程度の資金使途の目途がついているということですか。

○文部科学省 ある程度のこういう分野にこういうところでこのぐらいかかるだろうという積み上げは我々は持っております。ただ、今後、公募になりますので、そののところは実際それとは違ってくるとは思いますが、実際には、技術戦略が定められます。その技術戦略の勝ち筋とか、重点配分とか、そういうのに従いながら、具体的にテーマをブレイクダウンして、どういうプロジェクトにどういう公募をかけるかというのをやって、4月以降JAXAで公募させていただく、そんなことを考えております。

○経済産業省 今、千原局長から御説明いただいたとおりですけれども、経済産業省として考えている内容については、経産省で会議体をつくりまして、そ

の中でも改めて審議した上で、またお諮りさせていただくというふうにしていきます。

○総務省 総務省も基本的に、文科省、経産省から御説明があったとおりでございます。まず、技術戦略でテーマが決まって、それに基づいてというところまで考えております。一方で総務省ですと、もともと情報通信を所管しているということでございますので、宇宙の中でも情報通信、電波の利用、そういったことを念頭に置きながらというところでございます。

○後藤委員長 皆さんからもいろいろ御意見を頂きましたが、とにかく今回この宇宙戦略基金1兆円について、宇宙というテーマについていえば極めて重要な項目であります。ぜひしっかりと運用と管理をやっていただいて、とりわけ、令和5年度の補正予算で3000億というのは、やはりスタートが大事だと思うので、是非そのところはしっかりやって、そしてそれを今後につなげてもらいたい。よろしくをお願いします。

それでは、ありがとうございました。皆さんから大変活発な御議論を頂きました。本日の議論の取りまとめをしたいと思っておりますが、本案の取扱いについて、私に御一任いただきたいと思っておりますが、いかがでしょうか。よろしいですか。

（「異議なし」と声あり）

○後藤委員長 それでは、そのようにさせていただきます。

事務局は年度末の宇宙技術戦略策定に向けて、引き続きしっかりと検討をお願いします。

## （2）宇宙基本計画工程表の改訂について

### <事務局より説明>

○遠藤委員 MMXは、2024年の打上げによって、いわゆる火星の探査において日本がリードするという議論だったと思えますし、これまでの宇宙政策委員会でもそこを死守することが一番になるという、重要な命題だったと繰り返し議論されてきたと思えます。あつという間に2年後になってしまっているのですが、この議論のプロセスを、どうしてこうなったのか、教えていただきたい。

もう一つ、ALOSについても後継機についてはどのようにするか、議論しなくてはならないということになっているのですが、普通に後継機がロードマップの中に出てきているのですけれども、これもどういうプロセスでこういうふうになったのか、ここでもあまり議論がなかったように思うのですが、教えていただけますか。

○風木局長 まず、前者のMMXの打上げです。御指摘のとおり、国際的な情勢を

踏まえてということであるのですが、地球と火星が位置関係でどうしても2024年から2026年、2年ということ、これは技術的にそういうことになります。

それから、諸外国の状況というのは、事実ベースで言えば米国の動向などがあるわけですが、MMXは、2026年に仮に延期すると地球帰還が2031年になるということです。今度、米・欧によるサンプルリターン計画は2028年打ち上げ、2033年帰還、これは公表されているベースの議論でありまして、こうなると、世界的な競争の中では引き続き当初の目的にしっかり対応できるという議論がなされているということでもあります。それから、ファクトベースで言えば、中国も競争相手になるわけですが、引き続き注視していくということです。今回、H3ロケット試験機1号機の打ち上げ失敗があった関係で、その後の議論を踏まえて、具体的な検証、これは探査小委員会の中でも若干議論がありましたけれども、今回はこういう形で検証の土台に載せたということでもあります。

それから、ALOS-3の件も、これまでH3ロケット試験機1号機で喪失して以来、CONSEOという仕組みで関係ステークホルダーで議論してきて、こうしたライダーと光学衛星コンステレーションを組み合わせる形でやっていくという形で関係者の議論を経て、衛星小委員会などの議論もあった結果、今のところはこうした検証のプロセスの中で工程表に載せているということでございます。そのプロセスは各委員の方にも御説明させていただいてきたところです。

○滝澤参事官 補足させていただくと、ALOSについては、ALOS-3の後は、そのままやらないということに既になっており、前回の政策委員会で、そのままALOS-3をJAXAが開発するのではなくて、全く新しい取組として民間の事業者の方が商業ベースでやったらどうなるのだというのと併せてやりましょうという話になったものを御紹介させていただいて、そこで、ライダーという全く新しい技術活用のところは文科省で、光学のセンサのところについては民間の事業者の方がどういう結果が出てくるのか見てみましょうとなった話が、今回、工程表に盛り込まれているので、ALOS-3がALOS-5になるみたいな話には全くなっておりません。

○文部科学省 MMXとALOSの関係は私のほうからも少し補足いたします。この工程表の検討に当たりまして、プロセスとしては、宇宙科学・探査小委員会でも、幾度か議論がなされました。まず、一つアメリカの計画が当初の想定よりも明確になってきている。2033年帰還ということがまずあって、そこは確たるものだ、もう一つは中国というファクターがあったと思うのですが、中国は情報が幾つかあるという議論も宇宙科学・探査小委員会でもなされて、幾つかある情報の中で最も早いケースでいうと2031年の可能性も否定できないのだけれども、そこはよく見ながら計画を進めるということ、もう一つは、この科学的意義については、火星衛星からのサンプルリターンということは、世界初は年度によ

らず確定します。中国も火星衛星そのものではないということと、中国の発表情報を見ますと、どこまでのサンプルリターンができるか、まだやや不明確なところがあるという議論も探査小委員会でなされてきました。なので、米・欧の関係におきましては、日本のほうが早いということは分かるだろうということと、中国については引き続き注視しながら、科学的には損なわれないということですので、2026年度内になっていくという議論がなされて今に至ったものです。

ALOSの後継機につきましては、確かに、昔、工程表にALOS-3後継機とか、ALOS-4後継機という記載がございましたが、現在は無いということで、次期の光学衛星の検討につきましては、丁寧なプロセスを経て、産学官の議論を経て決めていこうということまでは記載されているということでございます。

○片岡委員 今日、防衛省から発表があったCSp0イニシアチブは非常に大きな一歩だというふうに思います。御苦労さまでした。まだまだ宇宙領域の安全保障というのは多国間領域が基本ですので、ほかの多国間の枠組みがまだありますので、ぜひそっちのほうも早めに参加できるように引き続き努力していただきたいと思っています。

もう一つ質問ですけれども、準天頂衛星は、ウクライナの状況を見てもGPSの代替性として極めて重要だと思しますので、何かぱっと線表が引かれているだけなのですけれども、11機体制に向けた検討をどういうふうに行っているのか、言える範囲で御説明していただければと思うのですけれども。

○風木局長 まず、5、6、7号機の打上げの予定は初めて示すのですけれども、今回、一定の目途が立った。11機体制については今回着手しましたので、委託先も決まって、これから構想を進めて行きますが、具体的な打上げ時期はまだ示せる段階にはございません。

○片岡委員 分かりました。これは非常に重要な体制だと思しますので、できるだけ早く所要の結論を導けるように、何せ韓国も測位衛星にチャレンジしていることになっていきますので、周波数維持の観点からもこれは極めて重要なスケジューリングになってくると思います。

あと、アメリカと、5、6、7号機はホステッドペイロードしますけれども、11機、8、9、10、11号機の方もできればホステッドペイロードするということはアメリカを味方に引き入れるためにも重要だと思しますので、具体的なスケジュール感をもっとスピードアップしていただければと思います。これは内閣府だけではなくて防衛省もこれから絡むし、政府全体としてバックアップしていく必要があると思います。よろしくお願いします。

○風木局長 しっかり進めたいと思います。

○櫻井委員 個々のプロジェクトは非常に具体的なので、そのプロジェクトの

視点から見ると取っかかりがあるのですけれども、全体像で見ると何なのかというのがある、宇宙基本計画自体で、宇宙というのが舞台は非常に大きくて、時間の進み方は工程表の時間軸もそうなのですけれども、ざっくりしておられて、かつ執行体制は各省寄せ集めというか、みんなが集まって頑張ろうと、そういう形だと思います。宇宙基本計画でこれらをバンドルして話を動かそうという試みなわけで、この委員会としては、バンドルすることの意味をぜひ固有のミッションとして探求していただきたいと思います。それから、政策として宇宙政策というふうに銘打つ以上は、そこには、ある種の基本的な哲学とか精神とか方向性みたいなものが統合的に表れているということがとても大事なことです。その作業をぜひ時々思い出して、フィードバックして、頭を使って文章化していただく作業を併せてやっていただきたいというのが1点目です。

2点目としては、この議論の中で地上にいる私たちにとりわけ身近なテーマ、2番目の国土強靱化や地球規模課題への対応というところなのですけれども、防災関係の議論というのは安全保障とまた次元が違い、人類全体の課題だし、国土強靱化といえば日本国民の生活の安全という問題なので、次元が1、3、4とは少し違うベースの話だと思います。国交省あるいは内閣府の防災関係もあると思いますが、ミニマムで、プラクティカルな議論として土砂災害や浸水域、川の話、土砂法の話、そういう細かい話はむしろ国内で随分やっているの、これを衛星を使って、グローバルに、単に日本国の国土強靱化だけではなくて国際貢献としてどういうことができるのかという形で大きめに課題設定をし、これもクリエイティブな作業として問題を発見して、どういうことができるかを考えるという問題意識を持つのがよいと思います。

例えば先ごろのインドネシアの火山の災害であったり、フィリピン沖の地震もございましたし、思い出すと、パキスタンが氷河湖の決壊で国土が3分の1浸水しているという話があって、これは、それこそ衛星を使って、そういう議論ができるはずで、そういう話がないのはとても残念です。何か日本の防災行政の延長上の議論にとどまっているという印象がありますので、ここはぜひ研究していただきたいと思います。これについては海洋の議論とも連携されるというお話も伺いましたので、海洋基本計画とよくすり合わせるなり、事務局のほうと話をするなりしていただければと思います。

○風木局長 御指摘ありがとうございます。

1番目のバンドルする意味、宇宙をなぜ国がやるのかということについては、常に我々、念頭に置いてやっていきたいと思います。4つ書いたのですけれども、これを統合して、今、我々取り組んでいるわけです。それについて、日本が本当に宇宙を進める意思があるのかという問いを常に受けておりますので、今後も念頭に置いてしっかり、文章化も課題としてありましたので、世界情勢を

見ながら考えていきたいと思えます。

それから、防災の点は非常に大事な御指摘で、今年からフロンティアで海洋と宇宙もかなり連携を始めて、同じ会議体で議論するというのも始めております。一例を申し上げますと、津波の問題など、気象衛星「ひまわり」でずっと見ているわけです。併せて衛星のコンステレーションを将来的に、場合によっては使える可能性もあります。現在、例えばフィジーという国は津波の影響を受けやすいわけですが、準天頂衛星を活用して津波情報を、日本を通じて準天頂衛星から信号を配信しまして、フィジーの国民に流すという仕組みが実証で2022年度から進んでいます。それから、来年の島サミットに向けても準備しています。こうした準天頂衛星のアジア、海洋への展開を進めておりまして、今後も、より宣伝していかなければいけないかと思っています。その根底にあるのは、日本国だけの利益だけではなくて、アジア、世界全体にも貢献ということで考えております。したがって、これは地球規模課題への対応ということなので、こうした例示が足りないところは今後工夫していきたいと思っています。広報活動をしっかりやっていきたいと思えます。

○文部科学省 リモートセンシングによる国際貢献の観点ですが、補足させていただきますと、例えば「国際災害チャータ」や「センチネルアジア」という枠組みがございまして、火山が噴火したとか、そういったときにSAR衛星を使ってビフォー・アフターで差分を取ると、例えば山体がどのぐらい膨らんだか、そういったことが見えます。関係各国からそういう情報を頂くと、JAXAの衛星で緊急に観測して当該国にデータを出す、そういったことも実は既にやっております。先生が例示いただきました氷河が解けてとか、そういうのも見られます。光学衛星もそうですけれども、そういったところは引き続き、コンステレーションになれば、より頻度が高く見られるようになりますので、そういったことを頭に入れて対応していきたいと思えます。

○滝澤参事官 追加で補足させていただきます。資料2-2の63ページ。これは洪水のお話だけでございますけれども、「日本が優位性を持つ衛星による観測・予測、氾濫解析等の技術に関して、衛星による観測データ等を用い、アジア太平洋地域において洪水流出や氾濫解析、水害リスク評価を実施し、リスクマップ等作成により可視化を行う」、これは2024年度以降しっかりと取り組むということでこういう取組を、国交省に随分御指導を賜った結果、一緒にやっていただくことになっておりますので、引き続き、続けていきたいと思っております。

○松尾委員 基幹ロケットを打ち上げる宇宙輸送の所でございます。これまで、ここ数年、ちょっとだけですが、打上がっていたということではあるのですけれども、来年ぐらいから物凄い勢いで打上がるということで、これが上手くい

くと非常に嬉しいところかと思えます。ということではあるのですが、来年以降、H-II AとH3が混在するような形で打ち上がるのですけれども、これは問題なくやれるのかといえますか、射場としての運用は問題がないのか、ちょっと不安に思います。年間6機ぐらいのものが複数年度にわたって、何かが遅れると、打上げは大体遅れがちでございますので、そういった意味で、次の文章の所にも書いてありますが、射場の更新や整備とか、高頻度化に向けてということがあるのですけれども、いろいろ難しいようなお話もあったのですが、そういったことに対して積極的に今後行われる見通しなのか、お聞かせ願えればと思います。

○文部科学省

H-II AとH3は、同じ種子島射場ですけれども、2つある射点を交互に使いますので、H-II A同士、必要だった間隔、これは2か月必要だったのですけれども、それほど必要ではないということになりますので、ここに書いてある工程表はフィジブルな工程表ということになります。

○風木局長 それから、資料1-2の宇宙技術戦略の14ページにも、射場についてもしっかり様々な技術に取り組むということで、これをしっかり前進させていきたいと考えております。

○松尾委員 今、結構ロケットそのものについての技術という意味ではあるのですけれども、打つ場所についてはちょっと置いてきぼりになっているような雰囲気も受けまして、出来上がったものの、打てないとなることだけは避けなければいけないので、インフラの整備といいますと、新しさが無いということから、予算とかもつきにくいのかなという心配もありますので、そういった意味で、これほど連なっているような打上げがありますので、上手くいきますように、周りのインフラの所まできちんと整理しながらできるとよいかと思います。よろしく願いいたします。

○文部科学省 打ち上げの高頻度化に向けて補正予算を確保させていただきましたし、財務省の御理解も頂いて、H3だけになったとき、当面、6機打ち上げですけれども、将来的に7機以上打てるように、例えば衛星の組立てとか、そういったところの整備を既に確保して、今、着々とやっておりますので、御指摘に沿った形で頑張りたいと思います。

○松尾委員 色々お話を聞いて、造るのは三菱重工かと思いますが、造るためには社内的な予算が必要で、でも、打っていない以上、そういったこともやりにくいし、本当に打つのであれば投資ができるけれども、打てるのか、造れるのかという微妙なバランスに来ていたような気がいたしますので、どこかでブレークして前に進めるということがあって、今回、H3でできたものが、当然、基幹ロケットとしての、国としての打ち上げも必要でありますけれども、こうやって

値段を下げてもらうというふうなことがあるのだったら、商業化に向けてもできるような準備も必要かと思ひまして、一番気になるところでございます。よろしく願いいたします。

○後藤委員長 射場の整備自体は、地域の活性化とか、経済をかなり活性化させるという効果は期待できるのではないですか。

○文部科学省 おっしゃるとおりかと思ひます。地元の経済効果にも当然貢献するという事です。

○白坂委員 まずは、工程表の改訂、アップデートありがとうございます。あとは、打上げスケジュールが、もちろんこの後の打上げの状況を見ていると起きるかもしれませんが、一旦このスケジュールが決まったというのはすごく大きなことかと思ひます。

皆さん御存じのとおり、世界的には凄い数の打ち上げが行われ、特にアメリカはスペースXを中心に、とんでもない数が出てきている中で、日本は残念ながら、今年度は止まっていたというところがあります。そういった意味では、これがきちんと決まって、これに従って、ちゃんとこれを目指しながら打ち上げが行われるということが大切かと思ひますので、まず計画が決まったことが凄くよかったと思ひます。

もう一つ、それなりの期間、こういった宇宙基本計画の改定、工程表のアップデートに関わらせていただいて、今回すごく良いなと思ひますのは、例えば国交省を中心として利用省庁の項目がしっかりと書かれるようになってきたということです。全体を見て政策的に利用をちゃんと進めていく中で、これまでどうしても開発側のものばかりが載ってきていたのが、利用省庁側が書いていただけるようになってきた。全体を見ながらマネージしてくださっている中でどんどん進んできたのがすごく印象深いと思ひます。ここはこれで終わるのではなく、利用が必要なところはますます利用が進むように、利用省庁の計画がここにどんどん入っていく。「利用を促進する」と書かれているところは、その後からちゃんと利用省庁が追加されていく、こういったことを目指しながら、全体を見ながら、宇宙政策委員会の中で議論が進められたらと思ひます。

基本政策部会でもそういった議論がありましたので、報告させていただきました。

(4) 高市大臣より次のとおりご挨拶があった。

○高市大臣 委員長はじめ、委員の皆様、本日は大変御多用のところ、寒い中、御出席いただき、また、長時間の御審議を賜り、ありがとうございました。

世界では、積極的な宇宙活動を通じた経済・社会の大きな変革が起こっています。まさに国力の要素と言われる外交力、防衛力、経済力、技術力、情報力、この全てに宇宙は関わっており、その重要性がますます増していると思います。そのような中で世界各国が今、宇宙分野に力を入れております。日本、としてしっかりと勝ち筋を見据えた上で、戦略的に技術開発を推進していく必要があると思います。

本日お取りまとめいただきました「宇宙技術戦略に関する考え方」に示した具体的な技術分野につきまして、今後さらに、開発の進め方や優先順位を検討して、年度内に宇宙技術戦略として取りまとめさせていただきます。

また、本日御審議いただきました宇宙基本計画工程表でございますが、これは、今後20年を見据えた、10年間に実施する国の具体的な施策やプロジェクトを可能な限り記して、産業界の投資の予見可能性を高めるという重要な役割を担っております。宇宙基本計画工程表の改訂案には、宇宙技術戦略の策定と宇宙戦略基金のほか、H3ロケット試験機2号機の今年度中の打ち上げ、省庁による衛星リモートセンシングデータの活用促進、JAXAが民間事業者と協力して取り組んでいる商業デブリ除去実証技術（CRD2）の打ち上げ・運用など、日本が今後取り組んでいく重要な事項が盛り込まれております。今後、宇宙開発戦略本部において議論の上、取りまとめまいります。

我が国が宇宙先進国として、宇宙活動の自立性を維持・強化できるように、また、宇宙産業を成長産業にできるように、しっかりと政府でも取り組んでまいります。各省の皆様も本当にありがとうございました。委員の先生方も、ここまでの検討に大変な御協力を賜りましたことに心から感謝申し上げます。引き続き、年度内の宇宙技術戦略の取りまとめに向けてよろしくお願い申し上げます。本日は本当にありがとうございました。

○後藤委員長 それでは、本日の委員会は以上で閉会といたします。

以上